

2011 年度 リーディング・ユニバーシティ募金による
「21世紀社会のリーダー育成」助成金 活動報告書

2012 年 3 月 法政大学 国際文化学部 堀上ゼミ

2011 年度「21世紀社会のリーダー育成」助成金・活動総括

国際文化学部 教授 堀上英紀

【テーマ】

『学生による地域活性化活動と世界農業遺産』

【目的】

ゼミ活動の一環として 2003 年度から毎夏期休暇中に行っている各地の農村での援農合宿などから、地方ではどこも少子高齢化のため伝統的行事や日常生活に支障を来していることを思い知らされた。国土交通省国土計画局の「過疎集落研究会報告書・概要」（平成 21 年 4 月）によれば、現存する過疎集落約 62,000 のうち、今後 10 年以内に消滅の可能性のある集落数は約 2,600 とされている。

昨年度採択された本学の「地域リーダー育成」助成金で取り組んだ石川県羽咋市菅池町も、2006 年当時ほぼ「限界集落」に近い状況（高齢化率 51.4%）であった。羽咋市役所と連携しながら続けた活性化活動が功を奏し、この 6 年間で 3 組の 30 代の家族（合計 7 名）が移住し、「限界集落」から脱しつつある。しかし、将来を見据えた場合、地域住民の協力なしでは、持続的な地域活性化は困難と思われる。引き続き羽咋市近隣および都会の若者たちを菅池地区に呼び入れて共同で活性化に繋がるイベントを催し、彼らに現地の良さをアピールしてもらい一人でも多くの農業従事者の増員を計りたい。

一方、石川県輪島市も少子高齢化が進み、近年伝統的夏祭りである「輪島大祭」のキリコ（奉燈）が担ぎ手不足で出せない状況にある。ゼミでは 2007 年にユネスコの海外学生交流プログラムに採択され、ベトナムの三大学の学生たちと能登半島の伝統的夏祭りを体験したことが縁となって、それ以来輪島市の要請を受け毎年キリコの組み立て作業、市内練り歩き、キリコの分解・収納まで 3 日間に亘って参加し、輪島市の活性化に取り組んでいる。今年度は、ゼミ生以外にも約 20 名の学生を募集するほか、外国人留学生（本学）にも参加を呼びかけ、日本の伝統的祭りを通しての異文化体験だけでなく地域活性化への協力を依頼する。

また、石川県は 2010 年 12 月に羽咋市を含む 8 市町村からなる「能登の里山里海」を、世界農業遺産（国連食糧農業機関＝FAO が認定）に登録申請し、昨年 6 月に正式に認定された（資料-1）。菅池の巨大ひな壇と輪島市のキリコ祭りも含まれたので、今後世界農業遺産と地域活性化とを繋げる活動を支援して行きたい。これらの活動を通じて 21 世紀社会のリーダーを一人でも多く養成したい。

【計画】

- ・ 8 月 22 日～24 日に開催される「輪島大祭」では、キリコを担ぐだけでなく現地で「ほっと石川観光マイスター」の藤平朝雄氏にキリコに関する講演を依頼する。
- ・ 9 月 9 日～9 月 14 日まで菅池で稲刈り合宿を行うと同時に、世界農業遺産に関連した自然栽培実践田を視察する。また、翌年の巨大ひな壇のデザインを依頼するため、ゼミ生代表 3 名と羽咋工業高校を訪ねる。
- ・ 翌年の 2 月 27 日～3 月 5 日まで菅池で巨大ひな壇制作を行う。羽咋市役所農林水産課および菅池町会と連携しながら、今回は社会人も加え、さらにプロによる奉納演奏もひな壇で行う。

当ゼミが全国で最初に（2007.3）制作し、今では恒例となった棚田をひな壇に見立てた

『巨大ひな人形』を羽咋市の目玉行事の一つとして定着するよう市役所、羽咋市農業振興地域整備促進協議会、菅池町会などに働きかけて地域活性化に繋げる。そして『巨大ひな人形』の活動がより広い地域に知れ渡るようにチラシやHPなどを利用した宣伝を行う。

【活動内容】

・2011年8月の「輪島大祭」を企画するに当たり、ゼミ生と本学の国際交流センターを訪れ、留学生の参加募集について相談した。その結果、募集用のポスター（資料-2）を留学生の集会コーナーに貼り出すだけでなく、夏期休暇直前に外濠校舎の小教室を借りて説明会も行ったが、東日本大震災の影響もあったように思うような効果は得られなかった。ゼミ生の口コミで、フランスからの女子留学生1名の参加（資料-3）が決まった。また、輪島市での「ほっと観光マイスター」によるキリコに関する講演会については、電話による交渉の結果快諾して頂いた。講演後、輪島市東部の能登半島をチャーター・バスで案内して頂き、揚げ浜式製塩法など里海の利用保全についての知識を深めることが出来た。キリコ祭りは、8/24の夜6時から始まり、翌日の午前1時まで雨の中行われたが、体調を壊したり、怪我するものは皆無であった。後日参加者全員から送られてきたキリコ祭りに対する反応は、大好評（資料-3）であった。我々の参加の様子は北国新聞とテレビ番組にも取り上げられ宣伝に貢献出来たと思われる。

・9月9日～9月14日まで行った菅池での稲刈り活動の結果、中山間地にある棚田では大型機械の導入が不向きなため手刈りする部分も多く高齢化の進んだ地域では農家さんの負担が小さくないことが分かった。参加者の内3名泊めていただいた農家（北原要正）さんの場合、稲刈り→籾乾燥→籾摺り→玄米の袋詰めをお手伝いし、3日間で30キロ詰めの米袋を48袋生産できここでの活動も北国新聞（資料-4）やTBS系列のテレビ・ニュースでも取り上げられた。

また、昨年度から羽咋市では「奇跡のりんご」で知られる弘前市の木村秋則氏を農業塾長に招いて自然栽培塾を開いており、その実践田として耕作放棄地を使って自然栽培を行っていた。

ちょうど稲刈りの前であったので、その田を視察に行ってみたところ、隣の慣行田の稲よりも分けつ後の株数が増えているだけでなく、茎の太さも大きいことが分かった。田を管理していた市役所職員に尋ねたところ3～5年程耕作放棄された方が、収穫が多いとのことであった。結局、無肥料・無農薬・無殺虫剤で耕作した結果、1反あたり6.5俵の収穫があったとのことである。さらに、慣行田および有機栽培田の生米と自然栽培田の生米をそれぞれ瓶に入れ水を加えて2週間放置した結果、前2者の生米はいずれも黒く腐敗したが、自然栽培田の生米は腐らずに発酵するとのことであった。その理由は判明していないが、羽咋市では自然栽培した米を作れば、TPPによって海外から米が入ってきても、「食べても安全な米」（資料-5）として付加価値があるので負けることはないだけでなく、これからの農業は自然栽培を目指すことになるだろうと考えていることが分かった。

・堀上ゼミが羽咋市菅池で援農活動を行うことになったのは、2005年12月に羽咋市役所農林水産課の高野誠鮮課長補佐と知り合ったことがキッカケである。高野誠鮮氏は、最近マスコミでスーパー公務員として注目を浴びている方で、羽咋市神子原地区（菅池もその一部）で採れた米をローマ法王に献上された方でもある。それ以後「神子原米」は通常の4倍の価格で販売される高級ブランド米となった。また、菅池を含む農家さんたちによる直売所「神子の里」を立ち上げ、昨年は年間1億円の売り上げを得ているとのことである。

そこで、「地域活性化のノウハウと世界農業遺産」について、市ヶ谷環境センターの主催で講演（2012.1.18）して頂くことを企画（資料-6）した。講演会には、多摩の学生のみな

らず、教職員も含め 80 名を超える人々が参加された。講演後、BT（ボアソナード・タワー）の地下食堂に移ってさらに 2 時間近くお話を伺うことが出来た。

・2012 年 2 月 27 日～3 月 5 日まで、羽咋市菅池の棚田で恒例の「巨大ひな壇」制作を行った。今回は、ゼミ生以外の他学部生や他大生（明治大学・早稲田大学）、院生、卒業生などの総勢 23 名（資料-7）が参加した。さらに高野誠鮮氏の講演に触発された社会人（東京ガスグループ、NTT データ、IIM ヒューマンソリューションなど）も合計 6 名参加された（2 泊 3 日）。また、オーストラリア原住民の楽器ディジュリドゥの奏者もお披露目初日（3/3）参加され、昼夜 2 回に亘り奉納演奏された。今年のテーマは東日本大震災に因み「起き上がりこぼし」の巨大ひな人形 2 体を制作した（資料-8）。幸い 3/3（土）は、朝から天気に恵まれ夜には、花火師さんによる打ち上げ花火の企画もあって、翌 3/4（日）は午後 2 時頃から雨となったが、2 日間で昨年の観客数を 200 名ほど上回る延べ 1,400 名に達した。記帳台を設け意見を自由に書いて頂いた結果、好評であった（資料-9）。

【今後の展望】

・2007 年から輪島大祭に参加してきたが、観光客を呼ぶためというのであれば、祭りの開始時刻を夕刻の明るいうちから始めた方がよいのではなかろうか。家族連れの場合、祭りのクライマックスが午後 11 時過ぎでは宿に帰ってしまうと考えられる。アンケートなどで一度観光客の意見を聞いた方がよいのではないだろうか。そのような作業なら学生たちにも十分可能と思われる。

・我が国の食糧自給率は先進国の中で最低（カロリーベースで 40%）であるため外国からの輸入に頼らざるを得ない中で、食の安心・安全が一層求められている。農業従事者の高齢化を考慮すると、無肥料・無農薬・無殺虫剤の自然栽培法は将来の農業の進む道を示していると思われる。しかし、昨年 11 月 6 日に羽咋市で第 1 回全国自然栽培フェアが開催された（資料-10）が、集まったプロの農業者はいずれも若手の 40 代が主であった。

一方、現在栽培している慣行田で翌年から自然栽培を行ってもかえって収穫が落ちることである。むしろ現耕作放棄地を活用する方がベターとのことである。以上のことから、今後は若者たちと一緒に耕作放棄地を使った自然栽培による野菜作りを始めていきたいと考えている。そして、その様なことを実現出来るリーダーを育てていきたい。

【成果】

「巨大ひな壇」の 2 日間のお披露目には、今年も県内だけでなく富山県などから延べ 1,400 名（初日 723 名、2 日目 695 名、ゼミ生調べ）を超える人々に来て頂き、地域活性化イベントとして大きな成果を挙げることができた。2 日目の午後 2 時頃からの雨が降らなければさらに増えたものと思われる。

今回は『巨大ひな壇』のチラシ（資料-11）を羽咋市役所や道の駅（野菜の直販所、「神子の里」）、農家カフェなどに置かせて頂いたこと、連日新聞（北国新聞や北陸中日新聞）に記事が掲載されたこと、NHK テレビ（資料-12）と HAB テレビ、NHK 名古屋放送局、地元ケーブルテレビなどで宣伝をして頂いたことが大きな成果に繋がったと思われる。

石川県の「能登の里山里海」が、2011 年 6 月に日本初となる世界農業遺産（GIAHS）に認定された。その一端を少しでも担うことができたのは、2006 年から行ってきたゼミ生をはじめとする様々な OB たちの積み重ねる実績の上に為し得たことで、過疎地域の地域活性化には更に地域を巻き込んだ活動が不可欠である。

* GIAHS とは、GLOBALLY IMPORTANT AGRICULTURAL HERITAGE SYSTEMS の略称で、世界重要農業遺産システムのこと。国連食糧農業機関（FAO）が、グローバル化の影響で、衰退の途にある伝統的農業や文化、土地景観の保全および持続的活用の推進を図ることを目的に、2002 年に開始した。

2012.3.菅池「巨大ひな壇」



第6回菅池・巨大ひな壇（2012.3.） 法政大学・国際文化学部



第6回菅池・巨大ひな壇（2012.3.） 法政大学・国際文化学部



第6回菅池・巨大ひな壇（2012.3.）法政大学・国際文化学部





第6回菅池・巨大ひな壇（2012.3.） 法政大学・国際文化学部

「21世紀社会のリーダー育成」助成金 学生活動報告

国際文化学部国際文化学科 堀上ゼミ 4年 吉岡翔平

私達堀上ゼミは21世紀リーダー基金を使用し2011年4月から2012年3月にかけて石川県の地域活性化活動に取り組みました。21世紀社会の地域活性化活動のモデルとなることを目標に、学生と地域の住人が連携し、継続してゆける地域を創造するために一人ひとりが主体的に活動しました。

私達の石川県での活動は大きく分けて三つに分類されます。2011年8月22日～8月24日の期間で石川県輪島市にて行った輪島大祭支援活動と2011年9月9日～9月14日の期間に石川県羽咋市菅池町にて行われた農業支援活動と2012年2月27日～3月5日に石川県羽咋市菅池町にて行われた巨大ひな壇制作活動の三つです。この活動を各自が主体的に取り組むことでこれからの地域活性化活動におけるリーダーとしての役割を考えてきました。

輪島大祭と菅池町の棚田での取り組みは2011年6月に世界農業遺産(正式名称世界重要農業遺産システム)に認定されました。世界農業遺産とは、FAO(国連食糧農業機関)が、地域環境を活かした伝統的な農業や、環境に配慮し、生物多様性が守られる地域社会の取り組みなどを後世に残すため、2002年から設けた制度です。私たちの活動はこれからの地域活性化活動の担い手になると共に、世界農業遺産をPRし日本の農業に貢献することが目的でもあります。以下で私たちが行った三つの活動の詳細を説明します。

輪島大祭支援活動について

輪島大祭支援活動は石川県輪島市役所の御支援の下、2011年8月22日～8月24日の期間実施しました。2007年の能登半島地震以来、観光客が減少し、また若者不足でキリコの担ぎ手が不足しているという輪島大祭の状況を知り、輪島市の活性化を目的としこの活動を行いました。より多くの人に輪島大祭を知ってもらい祭を活性化させたいという狙いから、ゼミ生だけではなく他学部や他大学からも合宿の参加者を募りました。海外へのPRとして法政大学国際交流センターにも協力をいただき、留学生の方にも募集をしました。結果として留学生からはフランス人留学生1名、ゼミ生以外からは法大生8名と法大生以外の方11名の方が参加を申し出てくれました。この人数とゼミ生10名を入れた29名で支援活動を行いました。

輪島大祭では若者不足によりキリコを担ぐ地区が減ってきているという現状があるため、この活動では自分たちが担ぐことになるキリコを組み立てる作業

から参加をしました。祭本番では地元の方と一緒にキリコを担ぎ、参加者一丸となって祭を盛り上げました。法政大学生らによる祭の参加は地元紙にも取り上げられました。また参加した方々が周囲に輪島の魅力を語ることによって、今後の宣伝効果も期待されます。また現地の方々やあらゆる参加者との間に入りスケジュール調整などの様々な交渉を行い、リーダーとして率先して行動することを学びました。

菅池援農活動について

援農活動は石川県羽咋市役所の協力の下、石川県羽咋市菅池町で2011年9月9日～9月14日の期間にゼミ生11名で実施しました。働き手が不足している菅池町の農家の農作業を手伝い、実際の現場を自分たちで見て今の活性化活動には何が足りないのかを知ることが目的です。また、私たちのような若者が町に来ることで町に活気を与えるという作用も期待されます。この時期は稲刈りに人手を必要とするため、この活動では主に稲刈りの手伝いを行いました。機械では刈りとることのできない田の四隅の稲の刈り取り作業を中心に、収穫、出荷作業の手伝い等も行いました。この活動は自分を受け入れてくれる農家をゼミ生自身が探し出して交渉するところから始まります。農作業を手伝う代わりに泊めていただけないか交渉をして、農家が承諾したら泊めていただきます。今回も全員が泊まる場所を確保することができ、各自の家で作業を手伝いました。また冬期に制作する巨大ひな壇をどの棚田に制作するか打ち合わせを現地農家の方と行いました。さらに巨大ひな壇のデザインについて羽咋工業高校の方と交渉しました。この活動では農家の方々との交流や農作業を通して、高齢化の進む農村の生活や農業の現状についての理解を深める事ができ、地域活性化活動を円滑に行うためには地元の方との強い信頼関係を結ぶことが大事だということがわかりました。

巨大ひな壇制作活動について

巨大ひな壇制作活動は援農活動と同じく石川県羽咋市役所の協力の下、2012年2月27日～3月5日の期間に羽咋市菅池町の棚田で巨大ひな壇を制作しました。過疎地域である羽咋市菅池町の地域活性化が目的で、夏合宿でお世話になった農家の方々へのお礼としての意味も込められています。なるべく現地住民の意見を取り入れるためにひな壇のデザインを地元の羽咋工業高校の生徒に依頼をしました。その生徒達の案中の一つに達磨のデザインがあったので今年は東日本大震災への復興を願うという意味もこめて起きあがり小法師にしました。

この活動もゼミ生だけでは人数が足りず、学内外で幅広く参加者を募集しました。その結果、法大生 10 名を含む 14 名の参加者を集めることができ、ゼミ生と合わせて合計 24 名で巨大ひな壇を制作しました。合宿の内容としては 3 月 2 日までに巨大なひな壇を制作、3 月 3 日・4 日に一般公開し、5 日の午前中に片付けという流れで実施しました。合計で 1300 名程の見物客を集めテレビや新聞の取材も受けました。この活動は私たちだけでは達成することが出来ず現地の方の助けを借り、参加者全員が一丸となってひな壇に取り組む必要がありました。そしてその中でリーダーシップを発揮するには自分から率先して動き、的確な決断をすることで参加者を一つの目標に導いていくことが必要だと学ぶ良い機会になりました。

感想・この体験を今後どう活かすか

これらの活動を通して、地域活性化をするにあたって重要なことは、いかにその地域の人々と一体となって活動できるか、また、若者たちに引き継いでいくことができるかということだと感じました。少子高齢化や若者離れが進む地域で、そこに住む人々にとって何が必要なのか、どうしたら現状を改善できるのか、ということを自ら考え行動に移すことで、まずは私たち自身が成長することができたと思います。そして自分たちが先導して周囲の協力を求めながら活動することで、リーダーとしての振る舞いを学びました。地元の学生や、他学部、他大学の学生にも声をかけ活動したことで、今後も継続的な活性化が期待できると思います。今後も今までの活動で学んだことを活かし、私たちの活動がモデルとなって地域活性化活動を支援していきたいです。